

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520894

研究課題名(和文)『レヴォルト・ロジック』期前後のジャック・ランシエール

研究課題名(英文) JACQUES RANCIERE IN THE REVOLTES LOGIQUES

研究代表者

福島 知己 (FUKUSHIMA, Tomomi)

一橋大学・社会科学古典資料センター・助手

研究者番号：30377064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：『レヴォルト・ロジック』は、1975年から81年までパリ第8大学のジャック・ランシエールとジャン・ボレーユを中心に形成された研究グループが刊行していた、労働運動史などに関する研究誌である。本研究ではグループに参加していた何人かの研究者へのインタビューを通じて、研究グループがもっていた非権威主義的な性格や共同研究者たちが共通して抱いていた越境への意志のようなものが、この共同研究を嚮導していたことを理解した。あわせて『プロレタリアの夜』や『歴史の名前』などランシエールが『レヴォルト・ロジック』の前後に構想した著作の分析をおこない、両者が一貫した関心のもとで執筆されていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Revoltes Logiques is a publication published between 1975 and 1981 by a research group two teachers of University of Paris 8, Jacques Ranciere and Jean Boreil, had organised principally for historical studies of social movement. We shed light to the reality of this collective research through interviews with a number of its participants. In particular, its non authoritarian atmosphere and participants' will to a sort of transborder were demonstrated. We also analyzed some books of which Ranciere had got the plan about the time of publication of the Revoltes Logiques, including Nuit des proletaires and Les noms de l'histoire, to know how they were led by his consistent concern.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：労働運動史 現代史 一九世紀史 歴史理論 フランス 国際情報交換

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 国内外の研究動向

ジャック・ランシエールについては1995年の『不和あるいは了解なき了解』刊行の前後から国内外で広く注目を集めるようになっていく。同書は国内でも2005年に松葉祥一氏らによる優れた翻訳によって知られるところとなった。さらにランシエールの思想を解説する優れた業績が、市田良彦氏や松葉祥一氏によって国内でも現れている。しかし、最近の研究は国内外を問わず美学・文学・政治哲学の理論的部分に焦点が据えられており、労働運動史研究時代のランシエールについては後景に退いているといえる。

実際には、国内ですでに1990年代に田崎英明『夢の労働労働の夢』や喜安朗『近代フランス民衆の「個と共同性」』によってランシエールの労働運動史研究が紹介されているが、それが後年の理論的豊饒とどのように結びついているかについては、まだ十分に研究されているとはいえない。

『レヴォルト・ロジック』時代のランシエールの業績は『民衆の舞台』の題名で2003年に一冊にまとめられて刊行された。また『プロレタリアたちの夜』をはじめとする1980年代の業績については今日でも容易に入手できる。

### (2) 着想に至った背景

フランス労働運動史については、ブルードン派の活動をはじめとする19世紀後半の諸流派の活動や1895年の労働総同盟(CGT)結成前後の歴史過程に焦点を据えて研究されることが多かったように思われる。このような視点にたつ国内の代表的な研究である谷川稔氏の『フランス社会運動史』(1983年)には理論的な意味でも今日なお学ぶところが多い。その一方で、労働運動史研究は、労働者の世界に関する社会史的・民衆史的研究へと対象を拡大することによって、より深層から歴史を描くことを模索してきた。喜安朗氏の『パリの聖月曜日』(1982年)はその初期の例であり、今日でも範例的である。

ところで、ランシエールは1992年の著作『歴史の名辞』において、社会史的研究においては人と人の絆にもとづく共同的な関係への着目が優先され、個々の人間がそこでどのように思考していたかについては主題的に検討されない傾向があると述べている。このような指摘は彼が1981年に出版した『プロレタリアたちの夜』以来くり返されているものであり、彼はプラトンから続く哲学的伝統を踏まえて、従来労働者は手を動かすことにおいて、詩人や哲学者は頭脳を働かせることにおいて定義されてきたと述べたうえで、それとは違って1840年代の労働者詩人の経験が両者の中間的なものであり、ある種「個性化の衝動」がそこで働いていたと述べている。彼の方法に学ぶことで、労働運動そのものの思想を再検討することが可能になるで

あろう。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、フランスの政治哲学者ジャック・ランシエールの思想を、彼が労働運動史研究に沈潜した『レヴォルト・ロジック』期前後に焦点を絞って検討する。

ランシエールは1969年からパリ第8大学で教員を務めていたが、1974年に『アルチュセルの教え』でかつての師アルチュセルに激しい批判をくわえた前後から、労働運動史の研究実践を行った。ランシエールの講義を受けに来ていた学生のアラン・フォールと共同で編集した1848年当時の労働者の発言集『労働の言葉』(1976年)はその最初の成果のひとつであり、1980年に『フランスにおける労働思想の形成』の題名で提出された国家博士号申請論文とそれをもとに翌年出版された『プロレタリアたちの夜』は主要な成果である。ランシエールによる労働運動史の探求は、『哲学者とその貧民』(1983年)や『歴史の名辞』(1992年)に至る理論的方法論的な研究を含みながら、1983年に出版されたガブリエル・ゴニー論や1987年のジョゼフ・ジャコト論など優れた成果をその後も生み出していく。

1975年から1982年までランシエールらを中心に組織され研究誌『レヴォルト・ロジック』の出版となって結実した一連の共同研究は、時期的に考えて、またその内容からいっても、このようなランシエールの労働運動史研究にとって、大きな意味をもっていたといえる。

ランシエールによる労働運動史は、労働者を語る存在とみなしその個性性を検討するという点で、知識人にしか語る資格を認めなかった哲学史・思想史的手法とも、労働者を集合的存在としか遇しなかった社会史的手法とも鋭く対立している。本研究は、労働運動史研究の方法に新たな光を投げかけるものであり、研究代表者である福島知己にとっては、これまで行ってきたシャルル・フーリエについての研究を労働運動史分野に拡張するために必要な過程をなしている。

さらに本研究は、後年の美学的・文学的・政治哲学的研究にいたるランシエールの思想的発展を跡付けるものでもある。

## 3. 研究の方法

### (1) 雑誌『レヴォルト・ロジック』の分析

『レヴォルト・ロジック』については国内外を問わずこれまで立ち入った研究がなく、その位置づけが明らかになっていなかった。掲載論文の内容や方法論の分析を行うことと共に、この雑誌がどのような状況のもとで作られたのか当事者たちへのインタビューによって研究を行う。

(2) 『プロレタリアたちの夜』(1981)と『歴史の名辞』(1992)の内容分析

ランシエールの二著の分析を通じて、労働運動史研究の方法論について再検討を行う。『レヴォルト・ロジック』時代の研究がどのように引き継がれ、また力点を移動されたか、さらに後年の美学的・文学的・政治哲学的研究とどのように繋がっているのか、切断しているのかを明らかにしたうえで、この二つの著作の意義を解明する。

#### 4. 研究成果

本研究課題の成果は、まず『レヴォルト・ロジック』に集まった研究グループの実態の解明である。さらにランシエールの前述の二つの著作『プロレタリアたちの夜』、『歴史の名辞』について分析を加えることによって彼の労働運動史の特質について検討した。以下では今後の展望を含めてこの二つの点について説明を行う。

(1) 『レヴォルト・ロジック』は、1975年から1982年まで、パリ第8大学のジャック・ランシエールとジャン・ボレーユという二人の教師を中心に形成された研究グループ Centre de Recherches sur les Idéologies de la Révolte が刊行していた研究誌である。出版社は Solin。

パリ郊外のヴァンセンヌに1968年に開校した実験大学を母体とするパリ第8大学は、その設立の目的から言って、従来の大学とは異なる学生が数多く通い、また他には例を見ない講義が行われていた。研究グループの参加者はボレーユとランシエールそれぞれの講義の出席者を中心とした若い研究者たちであり、その中にはパトリス・ヴェルムランやステファヌ・ドゥワイエのような哲学研究者、フランスのフェミニズム研究の大家でありやがてミッテラン政権当時に欧州議会議員も務めたジュヌヴィエーヴ・フレス、歴史学者のアルレット・ファルジュ、社会学者のパトリック・サンゴラニ、労働者・作家のミシェル・スルティなど多様な専攻と多彩な関心をもつ研究者がいた。

#### 『レヴォルト・ロジック』の編集者一覧

ジャン・ボレーユ  
ジュヌヴィエーヴ・フレス  
ジャック・ランシエール  
ピエール・サン＝ジェルマン  
ミシェル・スルティ  
パトリック・ヴォデー  
パトリス・ヴェルムラン  
クリステリアヌ・デュフランカテル  
ステファヌ・ドゥワイエ  
セルジュ・コスロン  
アルレット・ファルジュ  
ダニエル・リンデンバーグ  
ダニエル・ランシエール  
編集者は号によって変遷がある。編集長

は一貫してジャン・ボレーユが務めた。

『レヴォルト・ロジック』の中心はジャック・ランシエールとジャン・ボレーユであるが、共同研究参加者たちが異口同音に強調したのは、彼らの研究指導がすぐれて非権威主義的であったということである。しばしばランシエールの自宅などでも行われた『レヴォルト・ロジック』の編集会議では、提出された論文についてかなり詳細な検討が行われたが、けっして一方的な指導が行われることはなく、深い読解に支えられた建設的な議論が行われたという。

また、『レヴォルト・ロジック』における共同研究に参加した若い研究者たちはなるほど多士済々だが、インタビューから推察できたのは、ひとつの共通した特徴をもっていたことである。それを越境へのつよい意志と呼ぶことにしよう。もちろんその仕方は様々である。アルレット・ファルジュは歴史家であるが、哲学に深い関心をもち、ミシェル・フーコーやジャック・ランシエールら哲学者との交流を通じて、歴史学上の独自の問題設定と歴史記述の方法を提案している。パトリック・サンゴラニは社会学を専攻していたが哲学にも興味をもち、ランシエールらの方法に学んで、一九世紀の社会学史についての理論的な論考を発表している。ミシェル・スルティは哲学に深い関心をもつ労働者であり、労働運動を題材にしたコラージュ的な作品を『レヴォルト・ロジック』に発表した。ジュヌヴィエーヴ・フレスはフランスにおけるフェミニズム運動の闘士として当時いくつかの研究誌をすでに主宰していたが、それに飽き足らず、『レヴォルト・ロジック』における共同研究を指向した。その他様々な例からは、この研究グループが主張の同一性というよりも研究態度の共通性によって集まったということを知ることができる。

なお、本研究では『レヴォルト・ロジック』の一方の中心であったジャック・ランシエールに焦点を据えたが、1992年に急逝したジャン・ボレーユもまた強い求心力をもち、主導的な役割を果たしたことが共同研究参加者たちによって口々に指摘されたことを付言しておく。

(2) 研究期間中に行った調査旅行においては、共同研究参加者たちへのインタビューに加えて、資料調査を行い、『プロレタリアたちの夜』に引用されている諸著作を原典に遡って検討する試みを行った。この調査によって、同書に引用されているまったく異なる著者のテキストが、調査した図書館では、同一の請求記号に合冊されていたことや、同書でひとつながりの文章として転記しているテキストが、実際には別の著者による複数のテキストであることなどが判明した。これらの諸点は、研究の過程で方法論的な実践を行っていく際に、偶発的に起こったことでもあるが、それだけではなく、テキストを織り上げ

ていく際の本質的な要素ともなっている。

調査開始時に比べて、『レヴォルト・ロジック』およびランシエールの労働運動史研究に関する注目ははるかに深まっているとい  
ってよい。『レヴォルト・ロジック』にラン  
シエールが寄稿した論文を集めた論集の公  
刊や『プロレタリアの夜』などの著作の再刊  
はその証左であり、『レヴォルト・ロジック』  
の回顧的な証言も数点公表されている。また  
2012年に公刊されたランシエールへのイン  
タビュー『平等の方法』において、ランシエ  
ールがみずから当時の自分の研究の意義に  
ついて言及していることからそのことが  
窺える。

上記を踏まえて、福島知己は、ジャック・  
ランシエールによる歴史学批判・労働運動史  
方法論について詳解した論文を執筆中であ  
り、また『プロレタリアの夜』『歴史の名辞』  
などランシエールが『レヴォルト・ロジック』  
当時の問題意識を受けて執筆した一連の著  
作の翻訳を準備中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

福島 知己、1775年に出版されたネケール『立法と穀物取引について』の諸版について、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、34号、2014、61-72  
<http://hdl.handle.net/10086/26556>

福島 知己、左右田文庫について少々、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、34号、2014、73-85  
<http://hdl.handle.net/10086/26554>

福島 知己、共和暦をめぐって、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、33号、2013、24-45  
<http://hdl.handle.net/10086/25577>

Tomomi Fukushima, "L'économie politique selon Charles Fourier : économie de l'abondance et théorie de l'exception," Cahiers Charles Fourier, 査読有, no. 22, 2011, 35-55

福島 知己、パスポート、不安の肖像、一橋大学社会科学古典資料センターCHSSL EXPOSITION SERIES、査読無、1号、2011、1-9

〔学会発表〕(計 1件)

福島 知己、シャルル・フーリエにおける結婚・家族・夫婦、ワークショップ「正しい結婚 ～西洋近代から考える愛・性・家族の極限～」、2014年3月9日、福岡大学(福岡)

〔図書〕(計 1件)

シャルル・フーリエ、福島 知己訳、作品社、増補新版 愛の新世界、2013、744

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

福島 知己 (FUKUSHIMA, Tomomi)

一橋大学・社会科学古典資料センター・助手

研究者番号：30377064